米国・代理母の実態を描く衝撃のドキュメンタリー！

原題　Breeders : A Subclass of Women ?

代理出産

繁殖階級の女？

A FILM BY THE CENTER FOR BIOETHICS AND CULTURE

「代理母は人間ではなく　孵化器と見なされています」ゲイル

上映会

大阪大学中之島センター 講義室507

2018年1月20日（土）13時半～

講師：柳原良江さん（東京電機大学）

コメント：藤目ゆきさん（大阪大学）

日本語版制作　代理出産を問い直す会

http://nosurrogacy.lib.i.dendai.ac.jp/

代理出産を問い直す会　検索

「Breeders：A Subclass of Women？」について

制作者 Producer

本ドキュメンタリーは、米国のNPO団体「The Center for Bioethics and Culture（CBC：生命倫理文化センター）」により制作された。同団体は生命倫理に関する社会問題を対象に、ウェブサイトを通じた情報発信をはじめ、ドキュメンタリー映画制作や、講演、メディアのインタビュー出演などを行っている。米国内の法律制定に係る公聴会はもとより国連でも発言し、国際的に生殖技術政策への政治的発言力を高めつつある。ドキュメンタリー映画としては本作品のほか、卵子ドナーの健康被害実態を扱った『eggsploitation（邦題：卵子提供 美談の裏側）』（2010,2013）、匿名で提供された精子により生まれた人の問題を描く『Anonymous Father's Day』(2011)などがある。

作品紹介 About

代理出産は、21世紀初めの重要な論争の一つである。有名人、一般人の別に関わらず、家庭を築く目的で、人々はますます代理母を利用するようになった。けれどもこの方法は、女性、子ども、そして家族にとって複雑な問題をはらんでいる。

代理母となった女性や、その女性から産まれてくる子どもたちにどんな影響が生じるのだろう。金銭のやりとりは物事を複雑にするのか。親族や知人が自己犠牲で代理母になった場合に問題はないのか？　ある人が代理出産を美しい善行と言う一方、別の人はそれを赤ちゃん製造、妊娠・出産を貶める行為として批判する。いったいこの方法はどう捉えられるべきなのか。そして社会は代理出産への折り合い方を見つけられるのか。いや、そもそも私たちがこの方法に、歩み寄りを模索すべき理由はあるのだろうか？

本映画は、これまで比較的問題がないとされてきた「ボランティア」女性による「人助け」の代理出産に焦点を当て、代理母やその周囲の人々の語りを通じて、この方法が当事者の間にもたらす影響を描きだすものである。

日本における代理出産の状況

代理出産（代理懐胎）をはじめ「第三者の関わる生殖技術」に関する法律は2016年現在も存在しないが、民間ではかねてから実施が進んでいる。精子提供は、戦後すぐから慶應義塾大学病院を中心に行われてきた。卵子提供は、民間の不妊専門クリニックで構成されるJISART(日本生殖補助医療標準化機関)の一部施設でスタートしており、2013 年には民間の卵子ドナー登録機関が設立されている。代理出産の場合、2000年代初頭から長野県内の民間クリニックで実施されてきた。また国内の医療機関を用いる代わりに、外国での代理出産を手配する斡旋業者は多数存在し、外国人の代理母を用いた代理出産が盛んである。

生殖技術の利用のために外国に赴く「渡航生殖」の事例は、マスメディアでもしばしばとりあげられてきた。渡航先には、アメリカ合衆国はもちろん、安価で実施できる東南アジアや東欧の発展途上国が挙げられる。日本人の事例として知られるものに、2003 年にアメリカで代理出産を実施したタレント夫妻の事例（のちの品川事件）、2008 年にネパール人の卵子を用い、インド人女性を代理母として子をもうけ世界的に報道された事例（マンジ事件）、2014 年に判明した、独身男性がタイで少なくとも19 名の子どもを代理出産で得た事例などがある。近年は市場拡大が進み、セクシュアル・マイノリティーに特化した斡旋業者も登場しつつある。

2016 年に入ってからは毎日新聞が連載「チャイナ・センセーション」において、中国の裕福層が日本国籍の子どもをもうけることを目的に、在日女性に受精卵を移植、この“闇の代理出産ビジネス”からすでに86 人の子が産まれていると報道した。代理母となるのは主に在日中国人女性だが、日本人女性もいるという。

臓器はむろん、卵子も子宮も―そして子どもも―売買可能な“商品”であり、日本人の体もまたその例外ではない。日本はすでにグルーバルな人体市場の“内”にいる。

日本語版制作「代理出産を問い直す会」について

「代理出産を問い直す会」（代表：柳原良江）は2008年に東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」（現死生学・応用倫理センター）の若手研究員３名により設立され、代理出産を中心に、第三者の関わる生殖技術に関する問題の研究を行ってきた。一般的にこの方法は医学・科学技術的側面から語られがちだが、本会では特に、生命や人の意味・価値、あるいは搾取や収奪など人文社会的な側面に焦点を当てている。学術的な研究活動に加え、国内で代理出産に関する重要な社会問題が起きた時には会からコメントを発表している。近年では世界的な代理出産反対キャンペーン”Stop Surrogacy Now”による声明の日本語訳「今こそSTOP！代理出産」を作成した。

2014年には米国・生命倫理文化センターのドキュメンタリー『eggsploitation』の日本語版を制作（邦題『卵子提供 美談の裏側』）。右記サイトから有料で視聴可能。 https://vimeo.com/ondemand/eggsjapan

代理出産を問い直す会　http://nosurrogacy.lib.i.dendai.ac.jp/

本映画上映に関する問い合わせ先　eggsploitationjapan@gmail.com